

7. 万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。

説教

これはイエスさまの一番弟子であるペテロが諸教会に書き送った手紙の一節です。

今、日本は、地震や津波、原発による放射能洩れによって大きく動揺している状況にあります。このような非常事態に呑気に祈っている場合ではないと考える人もいますが、でもそれは間違いです。初代教会に於いても大飢饉があり、同時に激しい迫害や経済的な逼迫もあって、それこそペテロの言うように「万物の終わりが近づいた」と痛感する切実な緊張感の中に立たされていました。それなのに、使徒ペテロは、「万物の終わりが近づいた」のだから、今は呑気に祈っている場合ではないよとは言いません。むしろ、今や「万物の終わりが近づいた」のだから、今こそまずは神に祈るべきだと小アジアの諸教会に教えます。しかもただの祈りではなく、「心を整え身を慎んで」、祈りに集中して、特別に祈るよう教えるのです。

ですから、私たちキリスト者は祈らなければなりません。とにかく祈らなければなりません。心を神に向けて祈らなければなりません。教会に来て祈らなければなりません。毎朝、家庭にあって、夫婦で共に祈らなければなりません。家族で共に祈らなければなりません。信仰の友人と共に祈らなければなりません。そして同時に、ひとりで、毎日、十分に時間をとってじっくりと、聖書を読んで祈らなければなりません。

どうして使徒ペテロは祈るようにと教えるのでしょうか。要するに、祈らないと悪魔の友となっているからです。祈らないと神のみこころを行うことはできません。古い生き方しかできません。古い生き方とは、イエスさまを信じて救われる以前の生活のことです。それは自分の中心の生活です。ペテロ風に表現すれば、神に従うことなく自分の「さまざま欲望に従う」、欲望中心の生活です(1:14, 2:11, 3:20)。要するに、自分のやりたい放題、自分勝手に生きる生活です。不信者である「異邦人」が寝ても覚めても願っているように、「好色、情欲、醉酒、遊興、宴会騒ぎ、忌むべき偶像礼拝などにふけた」生活です(4:3)。こうした生活は、ただひたすら自分の欲の追求に明け暮れ、「人間の欲望のため」だけに人生を費やして生きる、言わば欲望の奴隷です。自分の欲が生活の指針です。自分の欲望が生きる価値観のすべてです。欲が最高価値であり、欲が最高の行動原理であり、最終目標、究極の目標です。欲のために生き、欲のために死にます。欲が神です。欲が偶像の神なのです。神に従うことなく、悪魔のしもべです。悪魔の忠実な奴隷です。悪魔の友です。悪魔の手下です。悪魔の使いです。このように、祈らない人は悪魔の餌食となります。悪魔に食い尽くされます(5:8)。吠え猛る獅子の如き悪魔の格好の餌食となって、悪魔の良き栄養となります。悪魔の力となります。食べられて、悪魔の一部に取り込まれ、悪魔の目、耳、口となったり、悪魔の有力な右腕となったりしながら、悪魔パワー全開で悪魔の働きをします。悪魔と共に、神の国を破壊します。人を殺します。この世に地獄を撒き散らすのです。これが祈らない人です。神を信じないこの世の人々は結局このように生きる以外にないのですが、神を信じるキリスト者も、祈らないと、滅びゆく世の「異邦人」のように生きる以外にありません。

頭では自分は神を信じて救われていると信じ、口で自分が神の子だと告白していても、神さまの恵みは毎日確認されなければなりません。来る日も来る日も、死ぬまで、天に召されるまで、毎日、神さまの恵みとみこころとが確認されなければなりません。そうでなければ忘れてしまいます。神さまの恵みもみこころも忘れてしまいます。そうして、神を信じぬこの世の人々と同じように生活するようになります。つまり、神が最高の価値、原理、生活の指針、目標なのではなくて、自分の欲を神と崇拝して生活するようになります。悪魔の友となります。神のみこころを実現するの

はなく、悪魔の意思を実現して生きるのです。そして、その先には神の怒りと呪いがあります。かつてノアの時代にそうされたように、神は悪魔とそれに従うすべての者をひとり残らず永遠に滅ぼされるのです(3:20-21)。

だから祈らなければなりません。悪魔に巻き添えを食って滅びないように祈らなければなりません。キリストが十字架で死んで私たちの罪を贖ってくださったのは、「私たちが罪を離れ、義のために生きるため」です(2:21-24)。「悪から遠ざかって善を行なう」ためです(3:11)。永遠に滅びることが宣告されている悪魔の巻き添えを食って滅びるためではありません。罪と滅びから救われた私たちが、自分中心に生きる罪から離れ、いよいよ神のみこころを行うためです(3:18)。聖く生きるためです(1:14-16)。特別に選ばれた聖なる神の民として神の恵みを証しし、祭司の王国として神と人に仕えるためです(2:9)。この罪深い世にあって、「りっぱにふるまい」神の栄光をあらわさなければなりません(2:12)。具体的には、「人の立てたすべての制度」を尊重し、妻は「自分の夫に服従し」、夫は妻を「尊敬」しなければなりません(2:13-3:7)。こうして、神と人を愛して神の栄光をあらわさなければなりません(3:8, 4:8-11)。世界に神の祝福をもたらさなければなりません(3:9)。

罪の世にあって正しく生きることは困難を極めます。「信仰の試練」があります(1:7)。「不当な苦しみ」(2:19)。「義のための苦しみ」(3:14)。「キリストの苦しみ」(4:13)。「キリストの名のための非難」(14)。「キリスト者としての苦しみ」(16)があります。でも、ペテロは、どうせ同じ「苦しみ」を受けるのならば、罪を犯して神に呪われて「苦しむ」よりも、正しく生きて「苦しむ」方が良いと教えます。それは「恥じる」ことのない、むしろ「喜ぶべき」「幸い」な苦しみだと言います(13-16)。たとえこの世でいのちを失うことがあっても、主の再臨の時には「称賛と光栄と栄誉に至る」、「金よりも尊い」、何よりも価値ある永遠の宝だと言うのです(1:7)。

それで使徒ペテロは、真に良いものを見誤ることがないように、祈ることを命じました。祈らなければ、世的に生きるしかありません。地上の命が最高の価値です。欲のために生きます。神のみこころではなく、悪魔の意思を行って生きます。そうして、終わりの日には悪魔と共に滅びるのです。

「万物の終わりが近づきました。ですから、祈りのために、心を整え身を慎みなさい。」(4:7)「万物の終わり Pa,ntwn to. te,loj」とは、文字通りには「すべての終わり(終着点、行き着く先)」で、「私たちの人生の終わり(死)」とも「この世の終わり」とも解釈できます。私たちは必ず死にます。いつか必ず死にます。どんなに長生きしても、最後は死ぬのです。そして、「終わり」は私たちの人生だけにとどまりません。この世にも「終わり」があります。天地宇宙の歴史にも「終わり」があります。その時、キリストが再臨します。そうして、「さばき」が始まるのです。罪の精算がなされます。最後の審判があるのです。すべての人間のそれまでの生き様はすべて審判されます。そして、この歴史の真実は、聖書を読んで、初めて知ることができるのです。つまり、聖書を読んで、祈るうちにこの事実を確信することができるのです。「心を整え swfrone,w」は「自制する、正気である」、「身を慎みなさい nh,fw」は「しらふ、冷静、適度である」を意味します。そして、それは「祈りのため eivj ta.j proseuca,j」です。本気で没頭すべきは「祈り」のみであり、それ以外は、この世の仕事も勉強も、人付き合いも、ほどほどに適当に自制しなければなりません。決してのめり込んではいけません。祈る暇がないほど仕事熱心なのは論外です。祈れないほど忙しいと、罪を犯します。悪魔の餌食です。もう食べられています。神の怒りと呪いを受けて滅びます。祈りましょう。最後に、具体的にどう祈るかをお話しします。

祈りは、効率よくではなく、時間をかけて、ゆっくり、じっくり、聖書を読んで祈ります。できれば朝早く、30分、1時間、2時間、3時間と、時間をかけます。1章、3章、10章、20章と聖書をゆっくり通読して、よく考えます。瞑想します。

私たちの現実の生活に於いては、神を見ることはできません。でも聖書をひとたび開くと、そこには神が堂々と登場します。そこには神中心の歴史が展開します。そして、そこから今日一日に展開していくであろう自分の一日を見直

し、これまでの、そしてこれからの人生を展望するのです。神の愛、義を学びます。そして考えます。どんなに自分が神に愛され生かされているのか、どんなに神に望まれ、期待されているのか、恵みとみこころを考えます。旧約の神、新約の神、そして初代教会の神は、この私の神であり、世界の神です。今も生きて働いておられます。そして、祈ります。教会のため、家族のために祈ります。友人、知人のため、自分のために祈ります。教会学校の教師は、子どもたちのために祈ります。主の祈りを祈ります。